

東北大学附属図書館報

木這子

BULLETIN OF
THE TOHOKU UNIVERSITY LIBRARY

—木這子（きぼこ）とは東北地方の方言で、こけしのこと。小芥子這子（こけしぼうこ）—

一つの漢字から

矢 島 玄 亮

広辞苑（昭和35年刊）によると「直」は、当直・宿直の略という。この直の字が用いられている秋田杉直物語という本は、国書総目録第一巻に著録されてあるが、この直は「なおし」と読んでいる。名詮自証というが「あきたすぎなおしものがたり」と読んでは、何を表わした書名なのかとの疑問が起る。そこでこの直の字は、広辞苑の説のように宿直の直で、古くから云われているように「とのい」と読むべきだという説もある。そう読めば宿直の夜話物語に託したと見られ、古人の書名法の主題にも協いそうである。その上、宿直（とのい）物語や宿侍（とのい）云々と名付けられた本のあることによってもうなずけるし、「なおし」と読んでいる「直物抄（図・事）」等の本よりはこの方が多いのである。作者は馬場文耕？とされているが、彼の伝説をみると擬せられる点が多いようである。

この直という字は、十と目と乚（かくす）を合せた会意文字で、十目の見るところ誤りなく、いかに隠すとも必ず顕われるという意、転じて嘘偽のないことに用いるという（大字典）。徳を論じた大学の本文には、十目のみるところ、十指の指すところ、それ厳かなかなとある。そこで直き心は恵（目を横に書いた字も同じ）である。この字は、説文解字では外は人に得、内は己に得云々と解し、正字通では徳の本字と云っている。故に徳の字はもともと恵と書き、天賦本然、清麗無雑である。（恵は近代人名にも見える）。もし徳一なれば、動いて吉ならざるはない（書経商書咸有一徳篇）とまで考えられたが、やがて人格の尊厳を表わし、人々の行為を規範する名辭にまで発達したのである。それ故徳に色々の形容詞をつけて呼ばれた例が初期の文献に見える。これは好生之徳、民心に治し（書経虞書大禹謨篇）とか、天の曆数、汝が身にあり（同上）という天賦人權が真実とされたからであろう。中国最古の文献で史官の編撰した堯典に、俊徳、否徳、次編の舜典に玄德の言葉が見える外は大方単独に用いられている。これは過渡期の現象で、既に国家体制が発足していたから、徳を基調としての政治が施行され、それに伴う名辭として用いられたのであろう。恵がイを添えて徳と書かれるようになったのは、秦相李斯の創製した小篆からと云う（大字典）。しかし論語の先進篇に、德行には顔淵云々と德行の熟語が見えるから、秦代以前、既に徳という言葉は行動倫理の範疇に入っていて、君子の徳は風なり・小人の徳は草なり云々（論語先進篇・孟子滕文公上篇）などと称せられた所以である。このように徳を対人関係の重大綱領とし、教義の根本とした儒家經典に懿徳、至徳、小徳、俊徳、盛徳、大徳、達徳、天徳、有徳等々の熟語がしばしば見えるのは当然であり、性善説にも繋ってゆくのである。（書経商書説命中篇には爵冑及悪徳惟其賢と見え、悪徳は、蔡伝に、呉氏曰、猶凶徳としてあるが、徳を下句に附けたと見る者もいる。葉氏の十三経索引がそれ、即ち上下四字句と見ている。この方が徳の本義に近いようであるが、一般には悪徳と連ねている）。それが一転して外部の影響を考慮するようになり、前掲説文解字の内外説となり、徳は得なりの説をも誘発して今日に至ったのであろう。これまた徳の意義の変遷である。このようにして意味が変ってきた一例として、少し長いが下に掲げてみよう。中村蘭林（1697～1761）は「凡そ古書を読むには、須らく其時の言辭にも通ずべし。蓋し三代の書には三代の言辭の氣象あり、漢魏の書には漢魏の言辭氣象あり。苟しくもその然る所を知らざれば、説き得て当ると雖も、或は其の言葉に畔くものあらむ。今姑く歴史を以て之を言へば、兩漢史の言ふ

所は六朝史と同じからず。六朝史の言ふ所も、亦唐宋史と同じからず。蓋し言辞の道は時と共に升降して、其の一ならざるあるも、亦自然の勢なり。但宋儒は毎々、近言を以て古言を解し、今意を以て古意を解す。是を以て古意にあらざるものこれあり。いま明德の一事を以て之を言うに、朱子は大学に於いて、心の虚霊不昧を以て之を説く。其意精妙ならざるにあらず。然りと雖もこれを古書に証するに、此例なきに似たり。それ明德の一語は、尚書・易・詩・左伝等に毎々之を言う。而して皆以て聖人の道德の光輝発越して以て物に施すものとなし、未だ嘗て心の妙用を以て之を説かず。豈大学の一書のみ此意あらんや」（先哲叢談巻七）と述べている。このように考えていた先哲は他にもいたが、ここに明德とあるのは徳を人物評価の規準にまで昇華した時代通念で、この明德とは大学の三綱領の一である明明徳のことである。この明明徳を後漢の大学者鄭玄（127～200）は、徳を明明にすと読んだ。これは天賦本有の徳と修鍊の明德と区別した見解で、後世王学に影響した思想である。明明の連文は書経や詩経等に見え、爾雅の釈詁篇では察なりと解しているが、堯典の「明々」は伝に明人を明挙す云々とあり、明明の連文とは見ていない。大学が撰述された頃は、既に明德という言葉は前掲中村氏の云うように解されていたので、鄭玄の説は殆んど顧みられないようである。

以上は一つの漢字が、用いられたその場合場合によって意味の違いのあることを思い付いたまま綴ったのであるが、漢字を国語として用いまた建国の初め頃から漢字文化に浴してきたわが国として、これについて十二分の理解をもつこと、殊に本館のように和漢書の豊富な図書館の司書として、その整理作業に携わり、或は参考業務に与る者としては、常に念頭にかかる問題であるから、ここにとりあげてみたのである。同じ漢字でも読み方が異なれば排列が異なる。難読の姓名や書名も顕われる。同訓異義も生ずる。更に字体の正異や造字の問題がある。音韻に至っては流動的であるためか、なお一層甚だしいものがあるようである。漢音呉音は常のことで、唐明・地方音等々、これらが入り交ってわが国の国語に影響したことは明らかである。不問談巻中に「筑前博多も、明朝の書に八角島と書く。また覇家堂と書く。唐音を知らねば通ぜざることなり。八角島・覇家堂、我国の人は「はかた」というを、唐人が音声に任せて書きたるもの也。日本風土記に山城を羊麻石呂。近世渡る唐本は、少しも唐音を知らねば通ぜざること多し。花瓶・緞子・看経・扇子の類、皆唐音の混りたる也」と書いてある。これをみてもその一端は理解されよう。今中国の書籍に載せられたわが国の言葉の宛字を見ても、それはやはり時代により地方により記録者によって各々異なるであろうが、たやすく判明することは稀れである。彼我の文献に表われた人名・地名等々の言辞が、今日では漠然とそうらしく思われるのが多く、或は全く不明・不可解のがある。しかしそれらの文献によって歴史は知り得るのである。孔子は文献学者であった。もし孔子なかりせば、今日の歴史はどう変っていたであろう。中国はもちろん、わが国、その他を含めて。特にその經典等。述而不作を宣言した孔子、爾後の著作、随って現存の諸々の文籍は、どんなかたちになったであろう。

文献は文字によって書かれている。これは洋の東西古今を問わない。歴大な文献を有する中国、それにも劣らない程の量を蔵するわが国、それらに見られる文字漢字を日々取り扱っている者として、今後漢字の命運はどう変わろうともそれとの対応は絶ち得ない状況にある。今日も古文書と対話する。

（古典目録編纂室）

イタリア科学・技術書展に イタリア大使出席

当館報の前号で紹介したイタリア科学・技術書展は予定通りの日程で開催され多くの関心を集めて終了したが、全期間に総計1300人、うち学外者170人の入場者があり、解説文を読みながら熱心に図書を見る者が多く盛大な展示会であった。

展示会の前日昭和52年12月5日、午後3時からヴィンチェンツォ・トルネッタ駐日イタリア大使、前田学長及びその他関係者が約50人参列して

特別披露がとり行われた。館長、大使、学長及び河北新報社社長の挨拶があり、大使のテープカットにより、展示会が開会された。大使挨拶及び終了後に来賓した大使の礼状を紹介して、今回の展示会の説明に替えることとする。

駐日イタリア大使挨拶

本展の開催にあたり前田四郎学長に深く感謝します。今日、科学史に大きな関心がもたれつつあることから、ヨーロッパの科学思想が形成され固められた時期であるルネッサンスから啓蒙主義運動までのイタリアの科学思想の成果である100点

以上の貴重な古書を日本に運んで来たことが重要であり意味があります。版画の図解により昔の科学・技術・機械装置の情報が示されており、また著名な製図家・版画家の手になるこれらの挿し絵の芸術的表現についても非常な興味をもたれることを私は確信します。準備にあたった関係者にお礼を申すとともに、日伊両国の文化的協力へ貢献する本展示会の成功を心からお祈り申し上げます。(大要)

駐日イタリア大使礼状

「大学の図書館はこの種の公開展示会を通常は主催しないとされているにもかかわらず、イタリア科学・技術書展の開催にあたっては、東北大学附属図書館が主要な役割を果たしたことに對して、深甚の謝意を表わします。東北大学が研究者や学生に対してイタリア文化を提供しようとする平素の努力の結果が今回の展示会の主催となったことと確信し、日伊両国の相互理解と協力に実をもたらすことを希望します。日本人のイタリアへの関心を育成するための他の事業を貴殿が企画されるならば、イタリア大使館及び私は喜んで援助をするつもりであります」(昭和52年12月14日付手紙の要旨)

この期間中に次の行事が併せて催された。

(1) 記念講演会、12月7日午後、文学部吉田忠助教授による「イタリアにおける近代科学の成立」、同田中英道助教授による「イタリアルネッサンスの建築」が本館で開催された。

(2) 本館所蔵イタリア古典本展示—今回展示されたものと同書が2点、ユークリッド「幾何学原論」1482、パチョーリ、ルカ「崇高な比例」1509のほか9点が常設ケースに展示された。

(なお、学報昭和53年1月1日号に記事が掲載された。)

宮城県立図書館

特別展示会への出陳

昭和52年度読書週間記念行事の一つとして昭和52年10月11日より11月21日まで開催された特別展示会「桃太郎の世界」に当館より下記の図書を県図書館へ貸出した。

記

1. 桃太郎元服姿(1冊安永8狩野文庫特別本)
 2. 桃太郎発端話説(1冊寛政4〃)
 3. 昔話桃太郎伝(1冊文化2〃)
- (閲覧掛)

第32回東北地区

大学図書館協議会総会

と き：昭和52年10月20日～21日

ところ：岩手大学附属図書館

上記の会議は、岩手地区が当番となり加盟40館中32館(63名)が参加して開催され、本館から和田館長、長尾事務部長、田代企画・渉外掛長が、医学分館から田崎分館長、松川事務長が出席した。

協議に先立って岩手大学学長の挨拶があり、次いで議長団の選出を行い、会務報告、一般報告、昭和51年度決算報告・監査報告ののち協議に入った。協議の結果は大旨以下の通り。

1. 昭和52年度予算(案)について
質議応答ののち原案通り承認
2. 役員の改選について
常任幹事館としての東北大学附属図書館をはじめ、監査館、図書館論文審査委員館をそれぞれ選出した
3. 次期当番館について
福島地区・福島大学附属図書館を承認し、併せて今後のローテーションを確認した
4. 「利用案内」「受入目録」など加盟各館で作成・刊行している逐次刊行物について
リストを取纏め「一覧表」として協議会誌に掲載することとなった
5. 図書館職員の研修活動の地区レベルでのあり方について
総会における記念講演等のほかは、当面県単位等による実績を積上げてゆくこととなった
6. 「(本協議会)インフォメーション・センター規定」について
時代の推移とともに、現状にそぐわない規定となったので廃止することとなった
7. (本協議会)30年誌の発行について
30年誌は発行せずに、会誌に年譜の掲載方を検討することとなった
8. 職員の表彰について
大原美治(東北福祉大図書館・退職)
勝正虎男(岩手医大図書館・退職)
栗原一郎(東北大学図書館・退職)
猪股助太郎(東北大学図書館・退職)
以上4氏の表彰方を決議した
9. その他
(企画・渉外掛長)

昭和51年度四学部部間共通費購入実績

文、教、法、経四学部で拠出している部間共通の図書購入費によって、下記の図書館資料を購入し、本館のレファレンスコーナーに備え付けてありますからご利用下さい。

図	書	名	冊数
	American book publishing record ; annual cumulative. 1975		1
	Bibliographic guide to Business and Economics. 1975. Vol.1-2.		2
	" Conference Publications. 1975.		1
	" Government Publications-Foreign; 1975.		1
	" Government Publications-U.S. 1975. Vol.1-2.		2
	" Law. 1975.		1
	" Psychology. 1975.		1
	Bilingual Encyclopedia. Vol.1-24.		24
	Books in Print. 1975.		4
	" Supplement. 1975-1976.		1
	British Books in Print. 1975. Vol.1-2.		2
	Brockhaus Enzyklopädie Ergänzungen. Bd. 23-24.		2
	Catalogue général des livres imprimés de la Bibliothèque Nationale. Tom. 222.		1
	Contemporary Authors. Vol.57-60.		1
	Das Deutsch Who's who.		1
	Dizionario Biografico degli Italiani. Vol.18 (1975)		1
	Dizionario delle lingue italiana e inglese. pt. 2: Inglese-italiano; M-Z.		1
	The Encyclopaedia of Islam. new ed. Vol.4. Fasc.61-64, 65-66, 69-70.		未完
	Encyclopedia of Library Information Science. Vol.15-16		2
	Bibliothèque Nationale. Catalogue général des livres imprimés. 1960-69. Ser.1, Tom.15-17.		3
	Grand Larousse de langue française. Tom.2-5.		4
	Great Soviet Encyclopedia. Vol.9,11.		2
	I.B.Z. Vol.11 (1975) Pars 2 Index Rerum.		1
	" " Autorum.		1
	IBN; Index bio-bibliographicus natorum hominum. Pars C.5.		1
	International Bibliography of the Social Science Economics. Vol.23.		1
	" Political Science. Vol.23.		1
	Les Livres de l'année-biblio. 1974.		1
	Meyers Enzyklopädisches Lexikon. Bd. 16-18.		3
	Meyers Neues Lexikon in 18 Bänden. Bd. 13.		1
	Publishers' International Directory. 2 Vols.		2
	Répertoire des Livres de langue française disponibles. 1975. 1-4.		4
	Social Science Citation Index (A) 1975 Annual.		4
	Subject Guide to Books in Print. 1975.		1
	Ulrich's International Periodicals Directory. 16th ed. 1975-76.		1
	" with Supplement.		1
	Who's Who. 1976.		1
	Who's Who in France 1975-76.		2
	World of Learning. 26th ed. 1975-76. Vol.1-2.		2
	ブリタニカ国際大百科事典		28
	中国学芸大辞典		1
	国勢総覧 第49版, 第50版		2
	教育年鑑 昭和51年版		1
	明治期刊行図書目録書名索引		1
	日本民族芸能事典		1
	世界年鑑 1976年版		1
	雑誌記事索引 累積索引版 人文社会篇 1965-69		
	シリーズ1政治・行政編, 4産業編, 5社会編, 6労働編, 9歴史・地理編,		各1
	10文学・語学編		
	雑誌記事索引 累積索引版 人文社会篇 1970-74		
	シリーズ1政治・行政編, 2法律編, 3経済編, 7教育文化編, 8哲学・宗教編,		各1
	9歴史・地理編		
合	計		134

昭和52年度大学図書館 職員講習会に参加して

整理課和漢書目録掛 細谷伸枝

昭和52年10月25日から28日までの4日間、文部省主催の標記講習会（東京会場）がオリンピック記念青少年総合センターで開催された。受講者は約110名で、本学からは3名が参加した。講習の内容を次に記す。1日目は、「研究者の図書館への期待」と題して、自然科学系を安西修一郎慶応義塾大学助教授、社会科学系を田中英夫東京大学教授が受持った。2日目は岩嶺敏生関西大学教授の「専門職能としての大学図書館員」、高橋進筑波大学教授の「大学図書館の使命」、小田泰正国立国会図書館業務機械化室長の「書誌調整の国際的標準化の動向」。3日目は田辺広千葉大学附属図書館事務部長の「我が国における書誌調整の標準化」、及川昭文筑波大学講師の「学術情報のオンライン検索」。4日目は、長沢雅男東京大学助教授の「大学図書館における参考調査活動」、川原和子名古屋大学図書館長の「米国における図書館活動」。その他に、「図書館業務の改善について」というテーマで共同討議が行われた。以上のように講義は広範にわたるもので、題目は前年度とほぼその内容が対応している。しかしながら、その中で書誌調整や情報検索の問題は、とくに図書館の今後の動向を実感させるものがあり、大変興味深かった。

第23回近世史料取扱 講習会を受講して

閲覧課閲覧掛 柄原孝夫

標記の講習会が国立史料館の主催で、昭和52年10月17日から21日までの5日間、国文学研究資料館を東京会場として開催された。この講習会の目的は近世史料を取扱う事例の増大に伴い、当該関係者に史料の概要、読解、調査、収集、整理、分類、保存管理などに関する基礎的な知識技能を取得させ、史料の保存、利用などの効果を高めることにある。受講者は44名で大学図書館が半数以上、それに文書館、教育委員会、史誌編纂室等に勤務し実際に史料の整理・調査研究に従事している者が多数であった。この講習会を受講して感じたことは、史料の取扱いが読解をはじめ非常に難しいが史料の補修、とりわけ和綴本の補修ひとつからでも一歩それに近づく日頃の研鑽・努力が必

要だということである。おわりに講習内容と講師は次の通りである。(1)古代中世史料概論—法政大学文学部教授豊田武、(2)近世史料概論〔Ⅰ〕—東京大学史料編纂所教授—山口啓二、(3)近世史料概論〔Ⅱ〕—東北大学文学部教授渡辺信夫、(4)近代史料概論〔Ⅰ〕〔Ⅱ〕—神奈川大学経済学部教授丹羽邦男、(5)史料の補修—元宮内庁書陵部専門官遠藤諦之輔、(6)史料の保存科学—高松塚保存対策調査会委員岩崎友吉、(7)幕藩史料読解〔Ⅰ〕—国立史料館大野瑞男、(8)幕藩史料読解〔Ⅱ〕—国立史料館井上勝生、(9)村方史料読解—国立史料館藤村潤一郎、(10)町方史料読解—国立史料館鶴岡実枝子、(11)近世史料の整理・管理—国立史料館原島陽一、(12)近世史料の分類—国立史料館浅井潤子、(13)近世の民俗資料—駒沢大学文学部教授桜井徳太郎。この他に国立史料館の見学及び史料館長をはじめとし、講義された国立史料館の講師全員と受講者による座談会が開かれた。

第6回漢籍担当職員 講習会に出席して

整理課和漢書目録掛 京極菊子

文部省並びに東京大学東洋文化研究所東洋学文献センター共催による上記講習会が、昭和52年11月28日から12月3日までの6日間、東洋文化研究所に於て開催された。参加者20名に講師9名、実習指導員として各科目について2～3名の教官が指導に当たって下され、あくまで漢籍担当職員を対象にし整理実務面を重点としたものであった。

講習の内容は、漢籍目録法、四庫分類、新学、漢字についてであった。中国は古くから目録学が一つの学問として確立されていた唯一の国と言われる様に、その長い学問史の系統的な蓄積の上に立つ四庫分類については2日間という時間をかけ、漢籍分類の変遷から四庫全書総目の説明及び京大人文研、東大東文研の漢籍目録など日本の代表的蔵書目録の説明があった。又目録法については、実物を取扱っての実習を併行し初心者にも実りあるものであった。以上は旧中国（辛亥革命以前）の漢籍についてであるが、近現代中国の文献の整理方法として、東大東洋文化研の目録に新たに設けられた類目としての新学の説明があったが、当面NDCを採用するということで、伝統的な四庫全書総目方式とNDCとが無媒介に併存している状態で、将来に分類方式上の大きな課題を遺しているということであった。漢字について

東北大学図書館職員総合研修会

は、字形即ち五体（楷行草篆隸）の歴史的推移の概略を、又現在の中国の漢字索引方式である四角號碼検字法の講義と実習があった。最後に東洋文化研究所図書室の代表的蔵書の展示及び書庫の見学があり、最終日は参加者の所属する各図書館の漢籍所蔵の現状について紹介があり、6日間の全日程があつたという間に過ぎた感じである。今后更に段階的継続的に講習をうける機会があることを希望するものである。

東北大学記念資料室だより

今回もまた、本学の歴史を語る貴重な資料が、本室に収集されたことをお伝えするのは、まことにうれしい。

1つは、昭和31年の本学創立五十周年記念事業に関する資料24点である。同事業会の本部が置かれていた事務局庶務部庶務課が今日まで保存し、このたび本室へ移管されたものである。五十年の記念事業は、①五十年史の編集刊行、②記念講堂の建築、③記念式典の挙行の3つで、いずれも大事業であったが、高橋里美総長のもとで成功裡に進められた。20年の昔である。その式典の前後には本学の卒業生が、東大をはじめとして7つの旧帝国大学の学長の半数以上を占めるという時期であった。そのときの根本資料が創立71年の今日本室に収納されたのは意義深い。やがて創立75年あるいは80年を記念しての事業がおこされるとき、大きな参考として活用されるであろう。式典関係のスナップ写真や、カラーライド、映画フィルム、録音テープなど、今日ではかけがえのない貴重な記念品である。また記念事業を開始するに当って参考にした「東北帝国大学創立二十五周年記念会報告書」（昭和10年）や、各方面の協力をもとめるために作成された「東北大学創立五十周年記念事業について」（昭和31年8月および昭和32年5月の2回作成している）などは、たちまち現在の本学にとって好適な参考となると思われる。

いま1つは、今まで学長室に置かれてあった資料7点で秘書掛からおくられて来た。大正12年の関東大震災火災、昭和8年の三陸沿岸津波、に対して本学が救護活動をおこなったのに対するそれぞれ内閣総理大臣斎藤實、宮城県知事赤木朝治からの感謝状である。その活動についてはかねて聞きもし五十年史にも書いてあるが、公式の書状は学長室に大切に保管されていたものである。

標記研修会は昭和52年11月25日（金）午後2時から本館大視聴覚室において開催された。今回は「図書館業務の機械化と問題点」についての浅野次郎氏（東京大学附属図書館整理課長）の講演であった。内容は、主として日本における大学図書館機械化の経過と現状についてであり、要点が判りやすくまとめられていた。電算機導入に当たっての問題点については、管理者の態度として担当者が動き易い環境づくり等のバックアップに徹するべきであることがあげられ、職員の問題としてはプロジェクトチームの意義や要員の確保・養成・人事管理上の問題、システム化と事務組織の変更にまつわる問題、機器の使用形態、及び受入・目録・閲覧の平常業務等についての問題が、実際に即して提起された。

我国では、支出負担行為制度等の会計法規や漢字処理が障害となって、いわゆるハウスケーピングのトータルシステム化を達成した国立大学図書館が未だに無いという状況であるが、最近の広島大学の雑誌管理や東京大学の収書ファイルの実験は、検索指向の新しい試みとして期待されるところである。

浅野氏は大阪大学で機械化を手がけられ、現在は国立大学図書館協議会図書館機械化調査研究班でも活躍なさっており、その豊富な経験と見識にもとずいたお話は、これから機械化を検討している私達にとって良き参考になった。

機械化は最終的には図書館業務の全般に影響を及ぼすものであり、従来の仕事の流れや方法を変更しなければならないところも多い。職員の理解と協力がなければ、有効な機械化は困難である。この研修会を契機として、図書館関係職員の学習・研究が一層深められることを期待する次第である。（総合研修委員会）

人 事 異 動

（11月10日付）

工学部電気系図書室

事務補佐員 高橋由美子

（本館）閲覧課閲覧掛に配置換

（11月15日付）

（農学部分館）図書掛

事務補佐員 井関けい子（旧姓伊深）

辞 職

（12月27日付）

医学分館長 田崎京二

任期満了

医学部教授 鈴木泰三

医学分館長に併任する。

東北大学附属図書館報「木遣子」 第2巻 第4号（通巻8号）昭和53年1月31日発行

編集委員長 松井好次 編集委員 竹原悦郎、田代 寛、沼田恵美、菅野博之、細谷伸枝

発行人 長尾公司 発行所 東北大学附属図書館 仙台市川内 電話 代表 22-1800 (5158)